

南極あすか新聞 1987初越冬の記録

宗谷医師会
市立稚内病院

高木 知敬

第21次（1979～81）と第28次（1986～88）南極観測隊の医学・医療担当隊員であった私は、越冬終了後、北大第一外科の故内野純一教授から「君は二回も南極に行って、ずいぶん寒いところが好きみたいだから、ちょっと寒いところに行ってくれるか」と命じられて40歳のとき稚内に赴任し、気が付くとすでに30年間当地で診療にあたっている。日本最北の街は南極からは一番遠い街だが、逆に北極からは一番近い。ふつうの医師はサハリンから目と鼻の先の辺境で、道内一の医療過疎地域であり、しかも気候も厳しい当地を嫌い、大体2～3年で異動していくが、幸か不幸か私は宗谷が嫌いではなかった。稚内の冬は、最低気温こそ氷点下15℃くらいだが、吹き付ける西風は相当強い。それでも烈風吹き荒れる南極あすか基地に暮らした身には「そよ風」みたいなものだ。

責任ある立場を解かれた私は、1987年に暮らした南極あすか基地初越冬の日々を、南極観測の歴史の1頁として後世に書籍として残したいと思うようになった。あすか基地越冬中、8名の越冬チームの融和と記録のために手書き新聞として日刊で発行していた「南極あすか新聞」を、パソコンでデジタル化復刻し、出版することを思いついた。B5判で305号もある新聞を、毎日5日分ずつデジタル化して、約2ヵ月間をかけて、原稿を完成させた。それを亜細亜社の編集人と装幀家に依頼して、手書き新聞の雰囲気や壊さないように復刻してもらった。装幀表紙はNASAが撮影した惚れ惚れするような南極大陸の衛星写真が鎮座する素晴らしい出来だった。

ふつう南極越冬記やその他の探検記は事業が終わってから懐古的に執筆するものだが、私の場合は現地で毎日執筆したので、現場の臨場感があり、観測や設営の試練と試行錯誤、日常生活の過ごし方、隊員の心情、気象条件や食事の献立などは正確で記録的な価値はあるとみる。30年間寝かせておいた記録は、当時の世相も反映し、同世代の人びとには自分史も重ねて興味を引くようだ。

もとより著作を販売するような気持ちはなかったもので、お世話になった人びとに贈呈して、その反応を楽しむつもりだった。しかし出版社は営利企業なのだから、それだけでは済まない。紀伊國屋書店やジュンク堂書店など大型書店に営業努力して、目立つ書棚に並べてもらえるようになった。極めて特殊なジャンルであり、かなり高額な書籍にもかかわら

ず、南極観測隊人気もあって、ある程度売れているようだ。

私が南極に越冬した時代は、国家事業とはいえ南極に1年以上も志願して越冬する医師は非常にまれであった。ところが医師も多様化して、現在では南極に行きたい医師はいくらでもいる。したがって、所轄の文部科学省にとっては、買い手市場となり、南極越冬隊医師になるのはかなり狭き門となった。

2回南極越冬した私には、南極観測医療隊員の適性は本能的に分かる。極地へ強い志向、外科系医師としての臨床能力、人格、特に集団生活における協調性、家族や職場など周囲の理解、そして自身の心身における完璧な健康が必須である。こういう人材は案外少ない。医師なら誰でもよいわけでは決していない。私が越冬隊医師として推薦した後輩医師は5人いるが、彼らはみな南極で活躍し、評価も高かった。

南極観測隊の医師は、各隊2名の枠しかないが、それを希望する医師なら適性を見極めたうえで応援したい気がする。

